

【社会科】教科提案

よりよい社会の形成に参画する子ども

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

これからは市民がこれまで以上に主体的に社会の形成に参画することが求められている。そのためには地域社会と主体的にかかわりをもとうとする子どもを育てることが必要である。そのために地域社会の様々な問題に気づき、その問題の解決を通して地域の一員としての自覚を育んでいくことが必要となる。よりよい社会の形成に参画する子を育成するためには、自分も社会の一員であるという考えのもと、身の回りの社会的事象を自分事として捉え、問題解決していく中で、社会とのつながりを実感し「自分はこうしたらいいか、何ができるか」など実生活に活用していかなければならない。

しかし、近年の社会科学習は、教室内部に閉じられていて何らかのかたちで地域社会に参画するような実生活・実社会に開かれた学習となっていないものが多いように思われる。地域の社会的事象を教材に学習を展開している実践は見受けられるが、社会的事象の教材化を図る有効な手段をとっておらず、調査・見学やまとめの活動が目的化しているために、多くの時間を費やすものの、学習が十分に教科のねらいに迫るようなものになっていないものも見受けられる。

このような現状を踏まえ、社会科の学習を教室内だけで終わらせるのではなく、地域における様々な課題を教材化し、それらを有効活用することで、子どもたちが学んだことを実生活・実社会に生かすことに重点をおいた社会科学習の在り方を研究していきたいと考える。そして、そのような学習を通して、「よりよい社会の形成に参画する子ども」を育成していきたいと考える。

さて、社会科は様々な社会的事象を対象として、学習を進めていく教科である。そのため、「教材」や「問題」は子どもたちが社会事象や概念を捉えるために媒介とするものであり、それ故にそれらは目の前の子どもものの見方や考え方に合わせて吟味されたり、設定されたりするものである。教材となる社会的事象と子どもが出合うことで生じる「問題」から学習をスタートさせ、子どもが価値判断、意思決定しながら追究し、そのような追究の過程を通して学んだことを実生活・実社会に生かし、活用していく取り組みを目指していきたい。

本校研究主題である「問い続け、学び続ける子どもたち」を社会科に当てはめて考えると、「社会参画を視野に入れながら、主体的に学びを深めていき、社会科のねらいに自ら近づいていける子どもたちのことである」と捉えている。そして、社会科部ではそれを上田薫の「わからないから、わからないへ」という言葉を授業づくりのキーワードの一つとして大切にしたい。個が問い続けていくのはもちろんであるが、同じ問題であっても個によって解釈や解決の仕方は異なる。それ故に問題解決の中でそれぞれの子どもの中で様々なずれが生まれる。個の中での「わからないから、わからないへ」が、学び合い、交流する中で「仲間のわからないから、自分のわからないへ」「仲間のわかったから、自分のわからないへ」と問題意識が醸成されていく子どもたちを育成していきたいと考える。

(2) サブテーマとかかわって

子どもの言葉でつくる授業とは、問題解決に向け三位一体の対話の中で、子ども自身が学び合い 子どもたちでつくる授業 である。子どもたちでつくる授業というのは決して子ども任せにするという意味ではない。子どもたちでつくる授業、つまり子ども中心主義は、子どもの可能性を信じ子どもに内在する可能性を引き出すものである。だからこそ、子どもの願い、興味関心、意欲を踏まえた上でいかしていけるように教師の出や支援が授業に大きく関わってくるものでもある。子どもが「問題」を「解決」していくために、教師は幅広く深い教材研究で複線の重層的に授業を考え、学びの事実をもとに検討し、その中で発問や板書、授業構成についてもきめ細やかに研究を積み重ねていく必要がある。

「問題」については子どもの心をゆさぶる活動や体験で感じたこと、資料などから読み取ったことをもとに、予想や追究の見通し、問題に対して追究の必要性を感じ、切実感をもって解決に取り組むような問題意識を醸成したい。しかし、その場合、社会認識として社会科の課題を十分克服できるものとならないと言われる。子どもにつけたい力を意識した知識の構造化を示すことによって克服していきたい。

また「解決」の場面では、様々な側面からとらえた問題は、個人やグループで追究する、問題の予想では、目に見える事実のみでなく、事実の背景にも目を向けるように働きかける、追究の幅を広げや深まりをもたせるためにも、子どもたちが交流する場を多く設ける、などのような学習過程にするよう意識していきたい。

(3) 社会科で育成する資質・能力及び態度

社会科の究極的な目標は、社会生活を営んでいくために必要とされる「公的資質の基礎を養う」ことである。この意味は「社会科の学習を通して、一人の人間として社会に対してどのようにかわり、社会生活の中で自分はどのように生きていくかを考え、社会の中で望ましい行動がとれるようにすることであると解釈している。そして、これこそが「よりよい社会の形成に参画する子ども」の姿であると考えている。これは子どもたちに自分なりの「社会認識」を育てることと関連している。したがって社会科学学習では「実践力」を身につけるようにするために、社会的事象に主体的にかかわらせ「社会認識」「公正な判断力」育てていくことが大切なのである。

「よりよい社会の形成に参画する子ども」が備えているであろう「資質・能力及び態度」を、以下の3つとした。

- | |
|-------------------------------|
| ① 社会認識【知識・技能】 |
| ② 公正な判断力（意思決定・価値判断）【思考・判断・表現】 |
| ③ 社会と関わる力【学びに向かう姿勢】 |

1つ目の社会認識とは、社会的事象に主体的にかかわり、確かな事実認識や社会的事象の意味や働きを考え、判断することを通して形成されるものであると考えている。社会認識を育成するためには、子どもたちが身の回りの社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり、それは、既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。社会認識は、社会的事象に対して疑問を抱くことも含め、自分なりに解釈（意味づけ）して考察して太らせていくことができるものでもある。そして、それは個と全体の往還の中で育まれていく。他者の考えと自分の考えを比較・関連・総合することを通して、自分の考えを再構成していく全体学習の中で、一人一人が友だちとかかわりながら、自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより、社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができると考える。そして、子どもが社会的事象に対して切実な問題意識をもつことによって、これまで視野になかった事実を視野に位置付けたり、違う見方や考え方との関係において自分の考えを捉えたりしようとする思考が見られる。つまり、子どもが主体的に問題解

決学習に取り組むことができれば社会認識を深めていくことができるのである。

2つ目は、社会的事象を一面的に理解することにとどまらず、多面的・多角的にとらえることで事象や課題を公正かつ総合的に判断する力、公正な判断力を重視したい。社会的事象の多くは、立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものである。多角的・多面的にとらえることで、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また、自分の見方や考え方を表現し合い、友だちと比較・交流することによって、考えが相対化され、より公正かつ客観的なものの見方ができるようになる。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで、自分の考えや夢をより広げ自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして、公正な判断力を育てることで“自分にとっては”“自分ならば”など、自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し、未来への生き方につなげていくことができると考えている。

最後に、社会と関わる力とは、学んだことをもとに、実際に社会に働きかけ、社会に参画していく力であると考えている。この力は、実際に社会に働きかけていくことで養われると考えている。社会科の学習で学んだことを生かし、よりよい社会の形成に子ども達なりに関わっていくという体験をさせることで、この力を強化することができると同時に、自分と社会とのつながりを実感し、自分なりに社会の様々な事象に関わっていこうとする態度も養われると考える。

社会と関わる力はその名の通り、社会に働きかけていく実践的な活動のもとでこそ、育成されるものである。

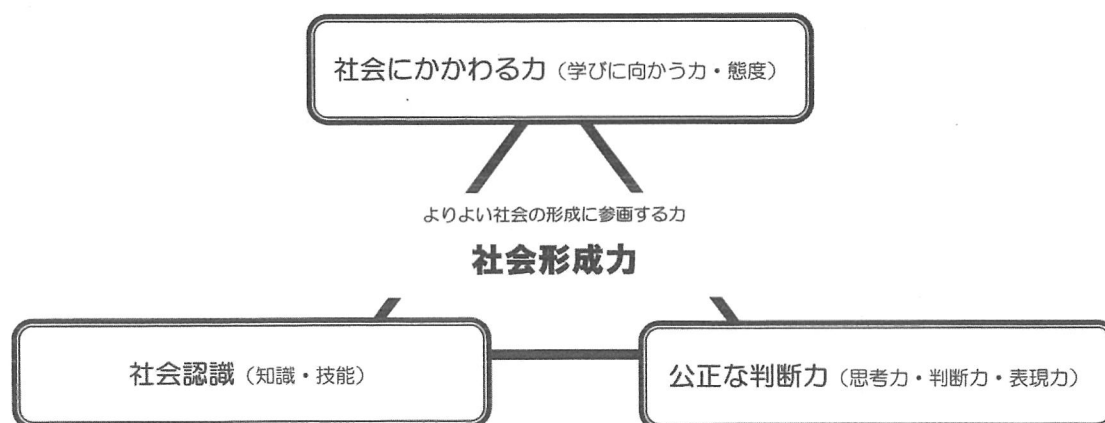


図1 社会科で育成すべき資質・能力の三つの柱

2. 社会科でめざす授業（何を・どのように学ぶか）

(1) 実社会・実生活に開かれたプロジェクト型（提案・参加型）学習

社会科部では、実社会・実生活に開かれた「問題解決学習」の中でプロジェクト型の学習を積極的にデザインしていく。そのような学習をデザインしていく上で以下の3つの学習過程を大事にしていく。

- ① 出合う（社会事象と出合う⇒学習問題を見出す⇒予想や学習計画を考える）
- ② 追究する（問う＋一人で学ぶ＋対話する＋振り返るの連続）
- ③ 生かす・つなげる（学習成果を他者に伝える・別の事象に当てはまる別の視点で考える）

これらの学習過程において、学習の対象を何度も見直し、学習問題を作り直していく反復活動によって社会認識を深め、その背後に隠されているものに迫っていく。上記3つの学習過程では習得・活用・探究を往還しながら子どもたちは学びを深めていくだろうと考えている。

それ故にこの3つの学習過程は単線的な学習過程であってはならない。学習の過程で子どもたちの考えが収束、拡散を繰り返し、それぞれの学習過程を往還しながら社会認識を太らせていくことにより、よりよい社会に参画していく子どもが育つと考えている。

① 社会認識育成の学習過程

社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げるため、より具体的・直接的に現代社会とかかわり合う。事象を単に知識として獲得するだけではなく、実社会に存在する「ひと・もの・こと」という具体的な対象と関わらせる中で認識される。「子どもたちは、今どのようなことに興味・関心をもち、追究しようとしているのか」や「この子はこの問題をどのようにとらえどのように向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。そして、追究していく過程を通して社会認識を深化させていくのである。自ら追究する中で獲得していった知識は、単に知識の増加にとどまらず知識を獲得するための筋道や学び方をも体得するはずである。そのために、教師は一人一人の子どもに寄り添いながら、学習意欲やそれぞれの問題意識を高めていく支援が重要となる。

② 公正な判断力育成の学習過程

子どもたちは追究の過程を通じて知識を獲得し、よりよく問題を解決する技能を身につけていく。問題を追究し、解決していく方法を学び、物事を関連付けて捉えることを学ぶ。その中で事象の認識の仕方、社会事象に対し主体的に疑問をもつ力、積極的に調べ必要な情報や知識を選択する力、友だちとのかかわりの中でその知識を深めていく力を身につけていくのである。そうした能力を身に付ける過程において、いろいろな学び方や考え方を知るとともに、価値判断、意思決定していく力も獲得していくのである。

③ 社会に関わる力育成の学習過程

子どもたちの社会参画力を育むには、自分と社会とはつながっており、自分も社会の一員であるという考えのもと、社会的事象を自分事として捉えることが必要である。そして、そのためには、問題解決学習の改善・充実を図りながら、社会とのつながりを実感し「問題に対して、自分はどうすべきか、何ができるか」など実生活に活用していくことが必要である。

R・ハートは、子ども参画を「人の人生や

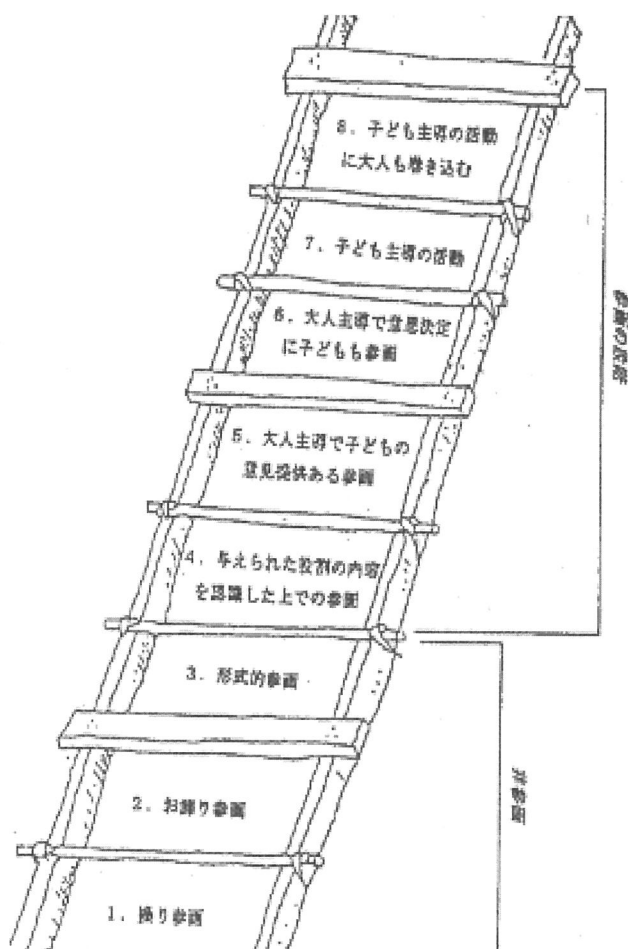


図2 ロジャーの参画のはしご

人が暮らすコミュニティの生活に影響を与える意思決定を共有するプロセスである」と定義している。また、R・ハートはコミュニティ参画という地域コミュニティへ子どもを参画させることの重要性を述べ、子ども参画の実践者にとっての指標として、活用される「参画のはしご」モデルを提唱した。「参画のはしご」では、子どもの参画形態を8つに分けて提示している。

- ①あやつり、②お飾り、③名目のみ、
- ④大人から役割を与えられ情報を与えられる、
- ⑤大人から相談され情報を与えられる
- ⑥大人が主導し子どもと共同決定する
- ⑦子どもが主導し、大人に指導される
- ⑧子どもが主導し大人と共同決定する である。

はしごの上段にいくほど、子どもが主体的に関わる程度が大きい。参画の形態が子どもの発達や状況に応じている必要性を示した。

非参画と言われる①～③は参加していない状態である。④は、子どもの側ははっきりと役割が用意されていて、子どもは参加しているというものである。教師が一方的に主導権を握る企画では子どもたちは本気にならない。ともに学び、話し合い、行動することが大切なのである。しかし、参画をめざすためにもプロセスは必要である。

本校では発達段階の違いはあるが、どの学年においても、④段階を意識して始める。4月の段階では子どもたちは社会に提案、発信するという経験が少ない。そこで学んだことをまとめ、追究する中で表現方法について役割を分担する。ここには大人も大きく関わる。

この経験をもとに、子どもたちから意見が出てきて、発信の仕方にも提案が出てくる。次に⑤⑥を経て実践力を育んでいく。

⑤は学習に関わってきた大人に対し意見や提案ができる。しかし、この段階ではまだ最終決定は大人である。④と大きく異なるのは子ども側から意見が言えるということである。

⑥は子どもに問いかけ、話し合い、決めていく。⑥までの活動でも十分社会参画をしていると言えるであろう。

⑦は、自分たちで何のためにやるかを自分たちで決めて、自分たちで分担をして活動をする。

さらに、⑧は子どもが自分たちでやるだけではなくて、大人を巻き込み活動するのである。⑦や⑧の子どもの主体的な参画は、地域住民にも大きな影響を与える。しかし、子どもの社会参画とは、子どもたちが企画し、運営する力を育てることではない。活動を通して地域の人にも地域の一員としての自覚と誇りをもたせることにもつながる。今年度は、目の前の子どもの実態とハートの参加の発達段階を意識していきたい。

ただ、常に子どもたちが「参画のはしご」の⑧を目指さなければならないということではない。

つまり、大人が子どもの参画を支援いくときに、子どもの選ぶどのレベルでも活動できるようにするための目安なのである。子どもにとっても選択が必要なのである。

つまり、子どもの意思決定を共有するプロセスであると考え、子どもの発達段階や能力、状況に応じ、臨機応変にさまざまな活動をつくりだす学習を考え、取り組んでいきたい。

またその問題を解決するプロセスを経ることで、子どもたちが社会参加に必要な資質・能力を身につける。つまり、提案を実現させること自体が目的ではない。社会科の実践の中で、提案や考えること自体が社会参画であるという意見も多い。「社会認識」や「公正な判断力」を充実させ「実践力」にあたる「提案・参加」を一つの到達点として重視していきたい。提案を社会に働きかけるためことで子どもたちは達成感をもち自己実現を感じると考えている。主体的に行動するためにはもっとリアルな社会と関わる必要があるのだ。

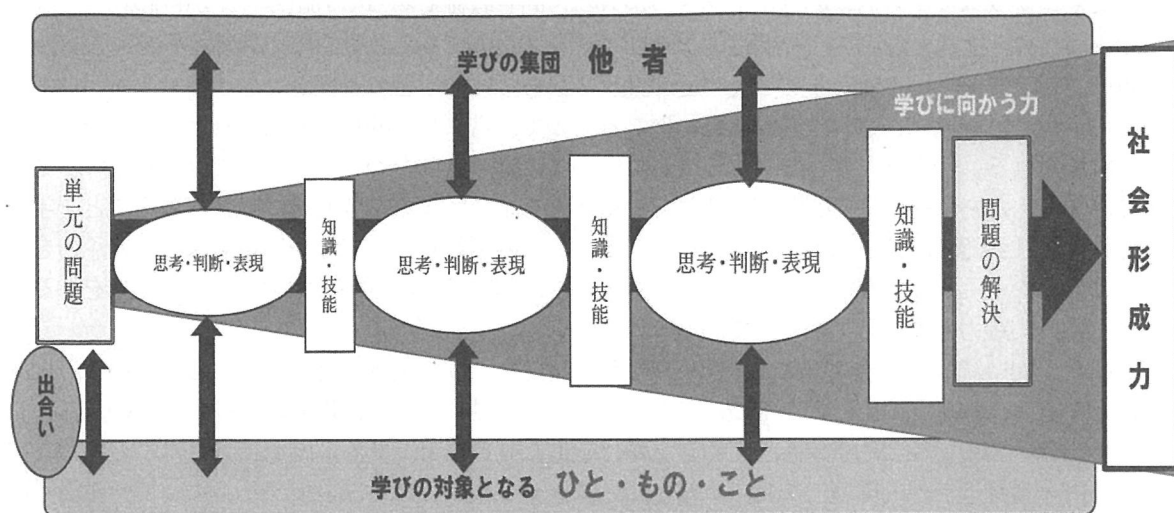


図3 社会形成力を育む学びの過程

(2) よりよい社会の形成に参画する子どもを育成する学習の6つの要件

よりよい社会の形成に参画する子どもを育てるために6つの要件が必要だと考えている。

- ① 地域課題の教材化
- ② 出会いと学習の見通し
- ③ 一人学習の充実
- ④ 協働的な問題解決
- ⑤ 振り返りの重視
- ⑥ 地域への働きかけ である。

まず、社会参画の教材は、地域教材であるということは第一条件であろう。社会科部では、この要件をもとに、地域に根差し、現実の社会に提案する社会科授業を目指したい。話し合いの成果を自治体や地域に提案・交流するプロセスを組み入れるなどして、学習プロセスを地域に開かれたものにするを大切にしたい。子どもを地域に根付かせ市民としての構えを作っていくことが必要である。また、社会科における社会参画の意味は何か。何をすれば社会参画といえるのかということも考えていきたい。

2. 社会科における「問い続け、学び続ける子どもたち」(実践例)

太田堯は、問と答の距離が非常に短くなっていると述べ、問と答の間を曲がりくねって考え抜いていく過程、その間で人間は発達を遂げると述べている。学習過程においても問いと答の間の解決を曲がりくねって考え抜いていく過程に社会科学習の本質があり、子どもの成長がある。

「問い続け学び続ける」ということは、習得・活用・探究を往還し、行き来するものである。多様な活動や対話、かかわりの中に開いている動的なものである。それが真の学びのプロセスをうみだす。常にクラスみんなに開かれている学習なのである。閉じるということは動的性格を失うことになる。教師は、子どもと子ども、子どもと問題などからずれを発見し、子ども同士をつなぎ、学習を動的にみて膨らみをもたせていく。そのプロセスを重視し、わからないことからわからないことにつながるようにするのも教師の役割である。ゆえに、教師の眼は徹底的に固定化せず、動くものによって動くものをとらえるという考えのもと、常に動的に子どもの学びや教材を追究することが必要なのだ。

また、クラスや子どもというファクターが入ると同じ教材であっても組み替えが行われる。その組み替えは、生きた学習の中で個性的なデザインをするのである。そして、教師と子どもという二重のファクターで編み直すことでそのクラスならではの学習の過程ができるのである。しかし、その過程や計画は修正され破られるためにあるもので、常に複線的重層的な計画、変化に強い計画が求められる。つまり、プロセスを重視していかないと、学びをつくっていくことは難しい。そして、子どもたちはその中で問題を追究していく仕方を学び、物事を関連付けてとらえることを学んでいく。社会認識、公正に判断していく力、友だちとの関わりの中でその知識を深めていく力を身につけていく。そうした能力を身に付けるプロセスにおいて、いろいろな学び方や考え方を知るとともに、実践力も獲得していくのである。

また、問い続け学び続けるための切り口として角度をつけた地域教材の開発も必要である。地域に学ぶとは、教材との出会いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」との出会いの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることである。地域社会とは子どもたちにとって一番身近な外的環境であり、日常生活と直接結びついている環境である。よって、生活空間としての地域社会に学ぶことは子どもたちの興味・関心を引きやすく、学習意欲を高めやすい。また、地域社会に存在する諸課題を子どもたち自身が自分の問題として理解し、その解決に立ち向かうことを可能にし、それが地域社会の一員としての自覚を喚起し、地域を愛する心を育成することにつながる。「地域に学ぶ」ことで「ひと・もの・こと」と直接触れ合うことができ、体験的な活動が組み入れやすくなり、追究意欲を高めていけるのではないかと考えている。

地域問題の解決を考えるには、地域の中だけで思考し、閉じてしまっていては、解決の広がりは見えなくなる。こうした状況を打開するには、地域の問題を一般化することが必要である。地域教材は地域の問題であると同時に、他の地域や国にもつながる社会問題としての側面がある。地域教材を日本全体や世界の抱える社会問題の一つとして位置づける活動を学習過程に組み込むことにより、子どもたちは地域の問題をより多面的、多角的に理解することができ、一つの立場にだけでない見方をすることができるようになることを考える。公民的資質は、それだけでは育てることができない。それぞれの事柄、教材に関する理解と愛情、社会的な見方や考え方、問題解決学習、よりよい社会への参画と関連して始めて育てることができるのである。

(3) 6年生「鎌倉時代 元寇」から

問題「文永の役が終わって「どうしよう」っていう時宗様に、参謀として助言をしたいな。みんなならどうする？」（攻撃する・守る・話し合う 3つの立場から）（一部授業記録を抜粋）

のり：私は守る方がよかったんやけど、悩んでるんよ。もし自分たちがその時代の農民として考えてほしいんやけど。例えばみんな博多湾に住んでいる人として。 C：うんうん

のり：絶対怖いやろ？土地も農地も無茶苦茶にされるやん。嫌やろ？だから、守りと話し合いで迷い中なんよ。みんなの聞いてて、攻撃とか守りとかいう前に、国書を返しといたらいいんかなって思った。農民からすると自分たちのふるさとをこわされるのはめっちゃ嫌やん？だから、やっぱり、国書を返して、まずは話し合っと思ったらよかったと思うんよ。

信也：僕も似てて、守りだったんやけど話し合いも考えられることもある。まず国書返した方がいい。それで話し合いが上手くいきかけたらそれに乗っかることも考えられる。いろんな使い道が国書で考えられる。国書は返したおいた方がよかったんじゃないかな。

創太：武士っていうてももともとは農民からなってるやん？本当は戦いたいわけじゃなかったん違う？今までの時代もそうだった。だからできるだけ平和になるために話し合うことがいい。平和っていうのはどの時代であっても、命を大切にすることだから、攻撃だ守りだっていうよりは仏教もそうだし。平和にするために話し合えばいい。元は聞く耳をもたないかもしれないけど、平和に解決する方が当時の人たちにとってはいいと思う。だから、いつもみたいに立場を変えて劇化して、その時の人の気持ちをみんなで考えたらいいと思う

教師：劇化するん？いいの？ C：するする。

りあ：私、劇化の前に言いたい。鎌倉の円覚寺に電話して聞いてみたんだけど。北条時宗が元の兵士も敵味方なく供養してたんよ。そのお寺の人は戦いは勧められません。攻める戦いではなく、国を守るための戦い。だから、思ったんやけど、守りと話し合いは似ているところもあるから立場を考えて分かれなくちゃいけないと思う。

ゆみ：劇化なら、側近役だけでなく、決断を迫られていた時宗の気持ちになって考えることも大事やから時宗の気持ちも大事にして時宗になったらいい。

立場を変えて劇化形式のグループ学習

のりがみんなに問いかけ、それを受けて信也の考えも変容した。創太は友だちの考えが揺れてきたことを感じ、劇化形式のグループ学習をすることで考えを深めようと提案した。劇化形式ここでの劇化形式とは、劇化形式で学ぶことで、歴史の傍観者にならずに当事者性を持ち、歴史を引き寄せて考えさせることである。そして、全体学習の後、自分の立場を変えることで、従来の立場だけでなく、複数の見方ができ、思考・判断・表現する学習活動としての意味がある。

劇化形式のグループ学習後、多くの子どもが友だちの意見を聞き考えを深めたり変えたりした。

このように、他者の意見に触れ自己の考えを更新・変容し学びをデザインする子どもたちの姿が本時の中で見られた。費用、技術面などそれまで話し合っていた内容について、立場を変えることでわかったという意見も多く出た。それは立場を変えることで子どもたちが客観的に自己をモニターすることができた。また、外交のルールや国書の意義、未曾有の事態での時宗の決断、平和の意味など社会認識の深まりを感じる意見やさらにわからなくなったことについても詳しく説明していた。また、単元を見通した子ども学芸員や地域への発信の言葉など、社会参画につながる意見も出ていた。出会った多くの方々が、学習を高めてくれる貴重な指導者となり、子どもたちにとって大きなエネルギーとなった。また、様々な活動を通して、自分の思いや考えを確かなものとするのができた。そして、いろいろな立場の人と接し、学校だけでなく現実の社会とのつながりをもった

ことで、対象・他者との対話をすることができた。そして、自分の考えを吟味することができ、地域社会に対する誇りと愛情を持とうとする変容が見られた。単元を通し個人の振り返りカード、作文等の活用により、他者との見方・考え方の違いや自分自身の見方・考え方の変容にも気づくことができ、三位一体の対話がうまれ、どの子も意識して、見通しをもって学び、追究をつづけることができた。

4. 研究の展望

(1) 社会科におけるみとりと支援

社会科における着目児とは単元を見通して設定する。着目児をおき、その子の思考の流れや変化、他の子とのかかわりを追い続けることが大切である。その着目児の思考から問いを設定し変容を見て、目標を達成したか具体的にみることができる。

授業をデザインしていくうえで、着目児なくしてデザインしていくことができない。なぜなら、着目児として、単元を通してつけたい力をもとに、単元で変容を期待する子や子どもどうしの関わりなどを視点に、着目児の変容を追いながら、子どもたちが「ひと・もの・こと」とどう関わっていくかをみとることができるからである。問題に対して着目児の解決、追究の仕方をみる。つまり着目児の「わからないことから、わからないことへ」の思考をみとることによって、クラス全体の子どもたちが問い続け、学び続けていけるように支援していくことができるのである。問題意識を深化していくためにも、一時間の授業におけるみとりに焦点をあて研究していく。教師は、学級全体で問題解決へと近づけていくために子どもの考えを把握する。子どもたちの考えを把握し、整理しながら、どの子の考えをとりあげれば学びが深まるのかといった視点を持ち、子どもたち自ら焦点化する話し合いができるよう個に応じた支援も大切にしていきたい。そのために、日々の子どもの様子を記録するためにカルテ、子どもの考えを記録した作文、授業記録、座席表などで個の学びをみとり、支援していく。座席表には、カルテを通してみとって子どもの変化や様子と作文や授業記録などをもとにした子どもの考えと子どもと子ども、そして子どもと課題の関係性を記録していく。

このような考えを大切にしながら、以下3点を視点にしてみとりと支援を行っていく。

① 子どもの生活とつながる学習問題

子どもたちが興味・関心をもつような活動や調査見学を取り入れた複線的重層的な単元計画が必要である。また、他の友だちとの学びの交流を考慮した学習問題が大切である。学習問題とは、子どもたちの問題意識からスタートし、“相互の刺激”をしあう中で深化、発展していくものである。学習問題と出合ったとき、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめ。問題解決への追究の見通しがもてる切実感のある学習問題でなければならない。

② ひとり学習における子どもの変容

問題と積極的にかかわっていくと、ひとり学習の問題意識が深まっていく。指導者にとって一人一人のみとりと支援が特に重要になってくる。ノートや作文、発言から個々の学びをみとり、子どもたちの変容を把握しながら単元構成にいかしていきたいと考えている。個に応じた支援をすることで、子どもたちが調べてきた様々な考えをつなぎ、焦点化しながら全体学習をつくっていく。

③ 子どもの関係性をとらえる

ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習で他者と対話させる中で、一人一人の学びの質を高めることができる。日々の授業や生活の様子を座席表などで記録してきたことをもとに子どもの関係性をとらえた上で、対話学習では、ともに学び、練り合う場面を特に大切にしたいと考えている。

(2) 研究仮説

社会認識、公正な判断力、実践力をそれぞれ重点的に育む3つの学習過程を単元の中に位置づけ、①出会い→②ひとり学び→③協働的な学び→④振り返り→⑤活かす・つなげる という問題解決的なプロジェクト型の学習過程において、子どもが「よりよい社会の形成に対する自己のかかわり方」を追究すれば、よりよい社会の形成に参画する子どもが育つだろう。

(3) 研究の評価

自分の思いや考え方の根拠となる資料等を、ひとり学習でみとるとともにその変容を把握する。様々な活動におけるノートや作文等で、個々の学びをみとり評価する。全体学習では、話し合い活動を通して、対話の深まり方を探り、評価する。子ども自身が学習を振り返る作文で、公正かつ総合的に判断する力が育っているかを評価する。単元の導入と終末には作文を書いて、自ら変容を意識し、確かめるようにしている。また、学びの足跡を掲示したもので確認したり、個々でファイリングしたりすることで、新たな課題を見つけて学びを深めてそういった子どもたちの評価をもとに、授業分析や子どもの変容や深まりを視点に、成果と課題を考察していきたい。